

平成28年度

福岡市公共事業再評価等監視委員会

《 議 事 要 旨 》

**【事後評価 3件 住宅都市局】**

- ① 都市再生整備計画 七隈線沿線地区
- ② 風格ある緑豊かな環境共生都市・福岡
- ③ 安全・安心を支える緑づくり（防災・安全）

## 平成28年度 事後評価対象事業

### ① 都市再生整備計画事業 七隈線沿線地区

(委員)

○ 指標1の地下鉄駅の乗客数の目標値2万6千人はどのように設定したのか。

(住宅都市局)

● 福岡市交通局が発表している将来乗客数の見込みにおいて、当該期間内での乗客数の伸び率約7%を採用している。

(委員)

○ この事業による効果を抽出しているものではないのか。

(住宅都市局)

● 基本的に乗客数の予測は、人口の予測から算出すると交通局から聞いている。過去の人口増加率から将来人口が予測されるため、その結果を用いて予測された乗客数についても、周辺整備の効果が間接的に含まれると考えている。

(委員)

○ アンケート調査において、「自然災害に対する備え」に対する地域の評価が全般的に低いが、具体的な記述があるのか。

(住宅都市局)

● 具体的な要因分析ができていないわけではないが、近年、自然災害が多発しているため、市民の防災意識が向上していると考えている。

(委員)

○ 吉武高木遺跡保存整備というのは、どのような事業なのか。

(住宅都市局)

● 遺跡の発掘跡を保存するために発掘跡を埋めて、その上に広場を整備している。現在、その広場内に展示物の整備等をしている。

(委員)

○ 整備の内容からすると、住宅よりも集客施設を増やしたという印象があるため、乗客数よりも降客数や乗降客数などを指標にした方がよいのではないかと考える。集客施設の増加や、今回整備した公園が出来たことで、住民以外の方が来訪することが考えられる。

(住宅都市局)

● 橋本駅に関しては、大型商業施設は車での利用が多いと考えているものの、従業員や利用者により降客数が増加していると考えられるが、このような大きな要因がない駅もあるため、指標に乗客

数を採用している。また、現状の地下鉄の乗客数と降客数については、ほぼ同数と考えている。今後、この沿線まちづくりを進めていく中で、集客性の高い施設の整備を公的に支援する事業を起こす場合には、降客数などを指標にすることが有効と考える。実際、七隈線の乗客数の増加の要因は、賀茂駅周辺や次郎丸駅周辺をはじめ、民間の住宅開発あるいは建替えなどによる人口増であると考えている。七隈線が博多駅まで延伸することで、更に人口は増えていくと考えており、それを支えるアクセス道路や豊かな住環境整備を今回の事業で行っている。

(委員)

- 今後の方策にアクセス性の強化とあるが、指標の評価値が目標値を超えた事業をさらに継続する際の考え方は整理されているのか。

(住宅都市局)

- 基本的には新たに指標を設定して、それに見合う事業を実施したいと考えている。

(委員)

- 指標の考え方は、今回達成されたところがベースとなってそこからの伸びということになるのか。

(住宅都市局)

- その通りである。

(委員)

- 福岡市は人口が増えている状況であるが、どこかで人口がピークアウトして高齢化が進むことが考えられる。今後、どこかで目標の考え方を変える必要があると思うが、その考え方はどうか。

(住宅都市局)

- 七隈線は博多駅まで延伸する計画であり、延伸効果を高めるために沿線の整備を進めていくことを考えている。将来、人口が減少に転じることになるが、駅直近に関しては、コンパクトとネットワークについて国の考え方を整理している状況である。ネットワークに関して、地下鉄は重要な要素だと考えており、まずは延伸の効果を高めるために、次の5年間は取り組んでいきたい。

(委員)

- 今後福岡市としては、七隈線沿線に人口を集中させるという考えになると思うが、一部が繁栄して他は何もしていないではいけない。バランスが重要であり、全体のグランドプランの目標を考えて欲しい。

(委員)

- 指標5について目標達成されているが、6割ぐらいの人が満足していない原因は何か。

(住宅都市局)

- 目標達成の大きな要素は、木の葉モールの整備や駅周辺のアクセス道路の整備を重点的に実施した橋本駅周辺や、公園整備を行った賀茂駅周辺など、整備を行った地域の満足度が上昇しているためであり、近くで整備が実施されていない方の満足度が低いと考えている。

(委員)

- 橋本駅や賀茂駅以外の地域の満足度は、23年から28年でどう変化したのか。

(住宅都市局)

- 満足度が上がった地域もあれば、下がった地域もある。

(委員)

- 満足度が下がった地域については、問題があることがアンケートで分かったということか。

(住宅都市局)

- 下がっているのは七隈駅であるが、近くに住んでいた学生が通学に変わり、駅周辺の学生が減少したことで活気が減った印象を持たれているのではないかと思っている。

(委員)

- 学生の居住が減った理由は、地下鉄が出来たためか。

(住宅都市局)

- そう考えている。地下鉄が出来たことで、西鉄大牟田線沿線から通学が可能になったことなどの影響が大きいと考えている。

(委員)

- 目標値は、自分たちで設定しているため、目標値の設定が低ければたぶんクリアすると思うが、例えば、指標5の満足度が38.4%と決めた根拠は何か。

(住宅都市局)

- 当時の基本計画の目標設定の考え方は、現状値が30%未満の場合、計画年数の13年間において現状値の2倍を目標値として設定するため、これを今回計画年数の5年間に換算し、38.4%（現状値の1.385倍）という目標値を決定した。

(委員)

- 整備した地域と整備していない地域とを合わせて評価する考え方はよいのか。

(住宅都市局)

- 評価の考え方については、今後検討していく必要があると思っている。

(委員)

- 特に不満、非常に不満、やや不満などの理由について、自由記載欄への記載はなかったのか。

(住宅都市局)

- 他の項目についての記入はあったが、指標5に関することは書かれていなかった。

(委員)

- 手間でなければ、今後アンケートを取る際には、書く欄を設けて意見を集約されてはどうかと思う。

## 【結 論】

### <事後評価について>

事後評価は、適切になされたと判断する。

### <今後のまちづくり方策について>

方針に基づき、適切に推進すること。

## 平成28年度 事後評価対象事業

### ② 風格ある緑豊かな環境共生都市・福岡

#### (委員)

- 今後の方針について、民間活力の導入によりどのように改善していくのか。規制緩和とは具体的にはどのようなものか。

#### (住宅都市局)

- 民間活力の導入については、水上公園や西南杜の湖畔公園の一角で、民間の投資によるカフェ等の施設を整備することより、賑わいづくりや公園のサービス向上を図っている。民間の事業が成り立つ可能性があれば、都心部やスポーツ施設のある大規模公園で、今後も進めていきたい。

規制緩和については、地域の身近な公園において、ボール遊び等規制が多く一体何が公園で出来るのかということが課題になっている。法律等で規制しているわけではないため、地域の話し合いの上で了解が得られれば、地域にとって使い勝手がよい公園へ変えていこうという取り組みを数年前から進めている。

#### (委員)

- 成果指標①「全市における緑の面積」の達成状況について、「農地などの緑は減少しているものの公園や民有地の緑は増加している。」とあるが、現在、都市計画においては都市内農地に着目しており、ドイツのクラインガルテンのように、都市に住みながら週末は都市内農地で農業を楽しむというような考え方が根付いている。福岡市も都市内農地の在り方を検討してもいいのではないか。

#### (住宅都市局)

- 都市内農地については、人口減少により開発が鈍化した都市においては注目されているが、福岡市は開発のスピードがまだ衰えていないため、現在の段階では市街化区域内の農地を積極的に保護する必要はないと考えている。その一方で都市住民が気軽に農作物を育てることへの需要が高まっていることも認識しており、例えば、西区のかなたけの里公園や花畑リフレッシュ農園では農業体験ができる事業を実施しているが、非常に人気があると聞いている。

#### (委員)

- 成果指標①で「緑被率」を用いているが、企業は「緑視率」も投資効果があるということで重視しており、指標に「緑視率」を入れることを今後検討してもいいかもしれない。

#### (住宅都市局)

- 警固公園に面したソラリアビルの壁面緑化などの事例にあるように、壁面緑化を活用して都心部の目に見える緑を誘導していきたいと考えている。

(委員)

- 東京は大都市だが緑が多く残っている印象がある。福岡のような地方の拠点都市はもっと緑の面積を増やすことが魅力になるのではないか。福岡市は人口が増えている中で、緑の総量を維持していても人口が増えれば一人当たりの量は減ることになるので、消極的な印象を受ける。

(住宅都市局)

- 福岡市の緑被率の推移については、S60年は60.2%、H19年は55.4%、H24年は55.5%であり、直近5カ年は維持しているが、S60年からは5%減少している。この減少をまずは食い止めようというのが「新・緑の基本計画」の考え方である。一方で福岡市の緑は、ほぼ周辺の山林部と市街化調整区域の田畑の緑で都心部の緑は少ない。都心部の緑を求めるアンケート結果も出ているため、容積率の緩和等インセンティブを付与することで企業による緑化を誘導し、都心部の目に見える緑を増やしていきたいと考えている。

(委員)

- 成果指標②「温室効果ガス吸収源対策に資する公園緑地の総量」とあるが、整備効果事例の写真は温室効果ガス吸収源になるような緑には見えない。CO<sub>2</sub>を吸収するためには樹木を大きく育てるなど、面積だけではなく質的な緑を増やす検討をするべきではないか。

(住宅都市局)

- 緑を増やしたいという思いはあるが、公園を整備する際、ワークショップ等により地域の意向に沿った公園をつくるとグラウンドや遊具広場になる傾向にある。

(委員)

- 地域のニーズが「温室効果ガス吸収源対策」ではなく、「楽しめる緑」であるならば、今後は指標を見直してはどうか。

(委員)

- 「温室効果ガス吸収源」は公園だけで解決するのは難しい指標であるとの印象を受ける。木造建築を増やすという考え方もあるし、民有地の緑を増やすというやり方もある。例えば、ブラジルのクリティバ市は一人当たりの緑の面積が50㎡近くあるが、これは民有地の緑の量を条例で定めて強制的に民有地の緑を増やした結果であり、欧米の多くの都市よりも一人当たりの緑の面積は多くなっている。

(住宅都市局)

- 成果指標②「温室効果ガス吸収源対策に資する公園緑地の総量」の表現については、今後検討する。

【結 論】

<事後評価について>

事後評価は、適切になされたと判断する。

<今後のまちづくり方策について>

方針に基づき、適切に推進すること。

## 平成28年度 事後評価対象事業

### ③ 安全・安心を支える緑づくり（防災・安全）

#### （委員）

- 成果指標②の「地域の公園で子供が安心して遊べると感じている市民の割合」については、公園の設備的なことを聞いているのか。防犯上のことを聞いているのか。

#### （住宅都市局）

- 安心して遊べる公園については、遊具などの施設の安全面と、見通しが確保されているかなど防犯上の安全面と、飛び出しの危険など交通上の安全面がある。

この成果指標の設問については、「地域の公園で子供が安心して遊べると感じているか」という聞き方をしているので、具体的に聞いているわけではない。

#### （委員）

- 分析するならもう少し詳しく聞いた方がよかった。

#### （委員）

- オープンスペースの評価の方法として、スペース・シンタックスという理論があるが、その中に死角がない状態を定量的に測る方法があり、その計算方法によると下枝を2mあげれば、緑は減るが視認性は向上する。また、近隣の家がどれだけオープンスペースに面しているかが重要な要素になる。昔の集落は、オープンスペースに多くの住宅の玄関が向いていたらしいが、近代、特に日本では、欧米に比べて都市デザインが貧弱なためオープンスペースにそういった理論が取り入れられていない。

#### （住宅都市局）

- 昭和50年代に緑を増やすために低木をだいたい植えたが、それが大きくなって視覚を遮っている状況である。高木が育ち緑の量が確保されたため、場所によっては、低木は役目を終えたとして撤去するような取り組みを始めている。これまでは、緑の量を追及してきたが、これからは質の向上、今ある緑のストックを磨き上げる方向へシフトしている。

#### （委員）

- 九大学研都市駅の周辺はここ10年で市街化が進んだが、緑が少ない印象を受ける。新しい町にこそ緑を多く配するべきでは。

#### （住宅都市局）

- 公園の基準は満たしているが、街路樹等の樹木が育っていないために貧弱な印象を与えるのかもしれない。植栽のスペースとしては潤沢にとっているため、樹木が育てば風格が出てくると考えている。



## 【結 論】

### ＜事後評価について＞

事後評価は、適切になされたと判断する。

### ＜今後のまちづくり方策について＞

方針に基づき、適切に推進すること。